

中小企業診断士の視点

第58回

危機の今、どう行動するか～渋沢栄一に学ぶ～



中小企業診断士 正木 一弘
一社)埼玉県中小企業診断協会

渋沢栄一（以下、渋沢翁）が主人公の大河ドラマが始まり、話題になることが増えています。渋沢翁は「論語と算盤」の両立、つまり道德と経済のバランスを保った経営が重要と語っていました。利益の私的な独占を嫌い、日本全体の富の増加を願って、500社近くの企業の創業・経営に関わったのです。以下、渋沢翁の著作「論語と算盤」から、今日の経営に活かしたいヒントをご紹介します。

1) 成功する志

志を最初に立てる時には、もっとも慎重に気を配る必要がある、とした渋沢翁。そして「自分の長所とするところ、短所とするところを精細に比較考察」したうえで、もっとも得意なところに向かって定めることを勧めています。同時に、それをやり遂げられる「境遇」にいるのかを深く考慮することも必要だとしました。現代でも経営方針を立てる時に行うSWOT分析（強み、弱み、機会、脅威の検討）が基本であることに、既に気づいていたのです。さらに渋沢翁は、世間の景気に乗じて志を立て、駆け出すような者は成功しないと戒めています。

2) 能率増進法

渋沢翁は、時間が管理できると「職工ばかりでは無い、通常の事務を処する人でも」能率が良くなると語りました。時間の空費は「製作する場合に手を空しくしていると同じ」ことで、「自身をどうぞ無駄に使わぬように心懸けたい」。渋沢翁は100年前に生産性を課題として指摘していたのです。

3) 危機の時

豪農の子に生まれ、攘夷を志し、一橋家に仕官、パリ万博に随行した後、明治政府の官僚に、退官後は銀行を創業…。「逆境のなかで生きてきた一人」と自任する渋沢翁は、逆境に立たされた際、自分に原因がある「人為的逆境」の場合は、反省して改善することが対策になると語っています。しかし、自分に原因のない「自然的逆境」では「自己の本分であると覚悟する」、つまり自分に与えられた社会の中での役割分担を考え、「来るべき運命」を待ちながら「たゆまず屈せず勉強する」ことを推奨しています。人間の力でどうにかなると考えると、逆境に疲れて後日の策を考えることができなくなってしまうというのです。なお、渋沢翁は関東大震災の時は83歳にも関わらず、直後から救護・救援・復興活動を率先して指揮し、東京の再興に大きく貢献しました。

コロナ禍で経営環境が大きく変わり、何を拠り所に今後を考えるか、迷うことも多いでしょう。新しい理論でない新しい世の中で生き残れないように思いがちですが、先人の経験の中に答えがあるかもしれません。中小企業診断士は先人の経験を尊重しながら、今後も企業様の状況に応じて、その想いと教えを経営の中に活かすお手伝いをしてまいります。

【問い合わせ先】

埼玉県中小企業診断協会

ホームページ：https://sai-smeca.com/

電話：048-762-3350

Eメール：rmcsai@nifty.com